



国際委員会だより

【第14回】

Message from International committee

実践的海外プロジェクト① ～はじめての海外業務をとおして～

国際委員会

池田 博 | IKEDA Hiroshi

建設コンサルタンツ協会の「海外市場対応能力の支援」の一環として、国際委員会から海外業務を紹介する記事を継続して掲載しています。今回から4回シリーズで「国内技術者が海外事業に携わり感じたこと」をテーマに、国内業務と海外業務の違いや海外業務の魅力について、現場で活躍しているコンサルタントの声をお届けします。

インタビュー対象者プロフィール

対象者：河野 雅裕 (KOHNO Masahiro) (34歳)
所属：三井共同建設コンサルタント(株) 海外事業部
専門分野：都市・地方計画
事業ステージ：計画・調査
経験年数：国内2年、海外8年
はじめての海外業務実施国：タイ王国
案件名：タイ王国カオラック海岸環境保全整備計画
(2006年3月)



写真1 タイの現地カウンターパートと(一番右:河野)

インタビュー内容

河野さんは、国内業務を2年間経験した後、海外事業部に配属されました。そして、配属から半年経たないうちにスマトラ沖大地震による大津波後に実施された「タイ王国カオラック海岸環境保全整備計画」調査に参加しました。

はじめに、初の海外業務で感じたことを尋ねました。

- Q1. 国内業務との違いはどの辺りに感じましたか。
- A1. 国内業務では、発注者から事前にある程度の事業内容(TOR)を指定されていました。一方、本業務では、現地のニーズ調査をし、その結果に基づいて日本政府及び現地関係機関に当方の事業案を提案するという能動的な業務でしたので、最初は戸惑いながらも非常にやりがいを感じました。また、面談相手は、中央省庁の大臣クラスや自治体の首長でしたので、自分が日本を代表して来ているということを実感しました。
- Q2. コミュニケーションは円滑にできましたか。
- A2. 英語-タイ語の通訳がおり、基本的に英語でコミュニケーションをとりました。しかし、当時の英語レベルは海外旅行の日常会話程度でしたので、はじめは相手の話す内容がよく理解できず大変苦労しました。その後、海外出張を重ねるうちに英語を道具として使えるようになりました。
- Q3. 業務で一番大変だったことは何ですか。
- A3. 本調査は2004年のスマトラ沖大津波の被災地の復興計画策定調査でしたので、2006年当時はまだ震災の傷跡が数多く残っており、現地の被災者への配慮に苦心しました。



写真2 タイのレストランでの食事(タイ料理)

- Q4. 現地の食生活はいかがでしたか。
- A4. もともとタイ料理は好物でしたので、すべて美味しく感じました。食べ物の好き嫌いがないため、海外業務には適していると思います。
- Q5. 現地で驚いたことはありますか。
- A5. ショッピングビルが立ち並び繁華街も賑やかである一方で、路上生活者や物乞いする孤児が多く驚くと同時に、貧富の差を痛感しました。続いて、河野さんが海外業務を実施する際に心がけていることについて尋ねました。
- Q6. 日本国内と現地での規格・基準は異なると思いますが、どのように対応していますか。
- A6. まず、当該国の規格や基準を入手・確認した上で、日本や国際基準を参照し、比較・検討します。文献やインターネットで調べきれない情報は、現地のカウンターパートに問い合わせたり、現地でヒアリングを実施し、必要な情報を入手します。
- Q7. ローカルスタッフと一緒に業務をする上で、注意



写真3 津波によって土砂に埋もれたタイの海岸の建物(2006年)

- していることや気遣っていることはありますか。
- A7. 日本人に比べ時間や仕事内容にルーズな方が多いので、現地の風土や相手の性格・立場などを考慮した上で、作業内容やスケジュールを分かりやすく説明し、理解してもらえるように努めています。
- Q8. 海外出張の際、安全面で注意していることはありますか。
- A8. 金銭等の貴重品は3~4つに分けて、別々に保持しています。それでも、鞆の中の小銭入れやテーブルに置いたデジカメを盗まれたことがあります。海外では業務外にも予期せぬことが多く起きますので、何事にも冷静かつ臨機応変に対応することが求められると思います。
- Q9. その他、現地の生活で工夫していることはありますか。
- A9. 海外業務は、複数のメンバーで働くことが多いので、他の方々に迷惑をかけないためにも、健康管理には気をつけています。たとえば、生水や卵は食べないなど食生活に気を配ったり、軽い運動で汗を流し体調を整えるなど、自分なりに工夫しています。
- 最後に、河野さんから今後海外事業に携わる建設コンサルタントの皆様へ伝えたいことを尋ねました。
- Q10. これから海外業務に従事する方々に伝えたいことは何ですか。
- A10. 語学のコンプレックスで海外業務に尻込みをする方も多いと思います。しかし、海外へ出ると建設コンサルタントが海外でどれだけ必要とされているかが分かりますし、また国内で培った技術が海外でも十分に通用することが分かります。また、外国の方々と接したり異文化を体感することで、国内業務では得られない貴重な体験ができるのも海外業務の魅力だと思います。更に、“日本”の素晴らしさにも改めて気づくことができると思います。海外業務に関心のある方は、是非チャレンジして頂きたいと思います。

まとめ

語学や安全面での不安を持つ方も多いと思いますが、河野さんの体験談を通して、海外業務に踏み出して頂くきっかけとなれば幸いです。